アメリカ合衆国における視察研修を通して
－１６日間の海外生活で知り得たこと－

酒井　功夫

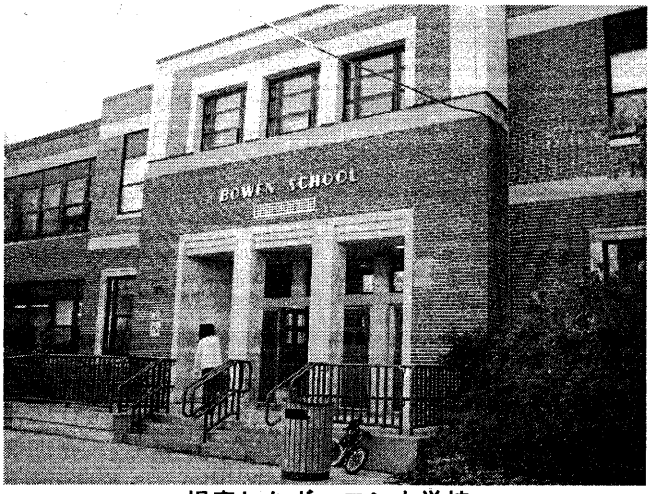
１　はじめに

平成１７年１０月２６日より１１月１０日までの１６日間，ボストン，ニュートン，ワシントンＤＣの３都市を廻る海外視察の機会に恵まれた。こんなに連続して自宅を離れたことがない私とっては，日本とは違った環境で生活をする楽しみが半分，不安が半分といったところであった。

乗り継ぎのためのシカゴ空港にて

今回の視察では，三つの目的を持って臨んだ。一つ目は，アメリカにおける特別支援教育の現状を知ることである。現在，附属養護，幼稚園，小学校，大学との連携をとり本校としての特別支援体制を構築しようとしているところである。そんな中にあって，インクルージョンの考えをもって，早くから担当するスタッフの育成や制度を確立したアメリカ合唱国の実態を把握したいと期待をもって臨んだ。

二つめは，アメリカの幼稚園から高等学校に至るまでの学校を見学し，施設，カリキュラム等日本の教育との違いを知ることである。日本における教育というと６・３・３制をとっており，特別な場合を除き，３０人から４０人の子どもに対して担任の先生が一人といった集団における教育を中心としてきた。最近になって，個に応じた教育に目を向け始め，ＴＴや習熟度学習等の工夫を凝らすようになってきた。しかし，習熟度学習についての実践例を聞いてみると果たして本当に大きな効果が期待できるのかといった疑問がでてきている。そこで，今度の視察では，カリキュラム，学習形態，，教員の資質向上のための施策，その他学校運営の何らかのヒントとなるようなことを学びたいと考えた。



視察したボーエン小学校

三つめは，教育的文化施設を見学することである。アメリカ合衆国は，知っての通り日本よりもずっと後に異国民の集まりによって作られた。しかし，今やいろいろな面で世界ＮＯ１の地位を築いている。そんなアメリカ合衆国の活気の源はどこにあるのか，その中心となるワシントンＤＣにおけるホワイトハウスや遺跡等，各地の文化施設を見学し，刺激を受けてみたいと考えた。

2　研修内容

(1) マサチューセッツ州ニュートン市における特別支援教育の現状

①　視察研修目的

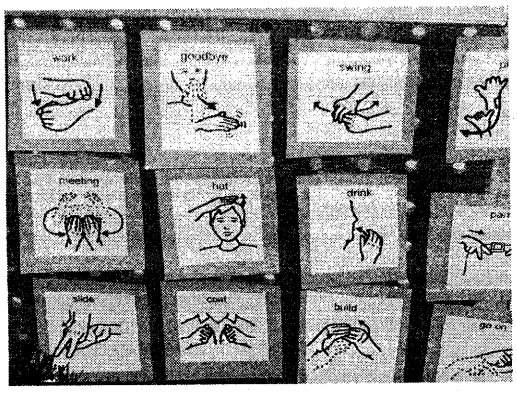
平成１５年３月に「今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）」が出された。現在は，各小中学校ともに，従来の特殊学級に頼る教育から全体的・総合的に対応する教育への転換を図ろうとその道筋を模索している段階である。本校においても，特別支援教育に関する各種研修会に多くの教員が参加したり，コーディネーターを設置し，軽度発達障害のあると予想される生徒のスクリーニングを実施したり，試行的に「個別の支援計画」の策定をしたりして少しずつ前に進み始めたところである。

このようなときに，ニュートン市における視察の機会に恵まれ，次のような目的を抱き，１６日間の研修に臨んだ。

・ニュートン市における特別支援教育の制度がどのようになっているのか。
・教員の専門性を育成していくために，市としてはどの様な取り組みをしているのか。
・市全体として，特別支援教育の取り組みをしている割合はどのくらいなのか。
・学校の組織はどのようになっているのか。
・教員の専門性と役割はどうなっているのか。
・専門機関との連携はどうなっているのか。
・保護者との連携をどの様にとっているのか。
・カリキュラムをどうしているか。
・特別支援教育を実施して，どの様な成果があり，どんなことが課題となっているのか。

②　教育委員会での説明から

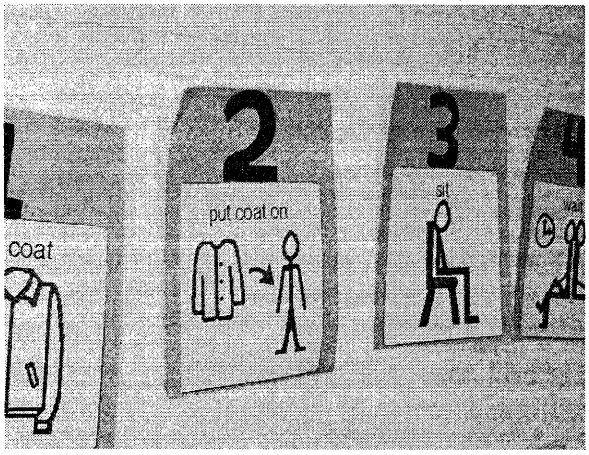
現在ニュートン市には，小学校が１５校，中学校が４校，高等学校が２校の合計２１校ある。教育委員会には，教育長の他６人の副教育長がおり，それぞれカリキュラム，予算，人事，運営，施設，特別教育（特別支援）といったことを専門的に扱っているそうだ，このことからも，特別支援教育をいかに重視しているのか，かいま見れた気がする。



個別支援シート

では，具体的にニュートン市における特別教育の実情はというと子ども全体の１８％が会話，身体的，精神的，社会的いずれかの障害を持っており，そのうちの９６％が住んでいる学区内の学校で，障害のない子どもたちと一緒（インクルージョン）に同じ教育を受けているということであった。特別教育のための予算として，住民の固定資産税が使われており，裕福な家庭が多いことから成り立っている制度であると説明されていた。次に，誰が特別教育に携わるかというと教員，保護者，それに心理学者や看護士等の専門的知識をもったスタッフ６人がチームを組み，対象児の個別の教育プラン（ＩＥＰ）を作ってあ

たっているということであった。この個別の教育プランは，ＩＱテストや習熟度テストをし，その実態を調べ作るのだが，一年に一度見直しを図るということであった。そしてもし，このような取り組みをして成果が見られないときは，コーディネーターと相談し，特別な学校へ行くことになるそうだ。



個別支援シート

以上のような特別教育の体制は，ニュートン市以外ではあまりやられていないということであった。その理由としては，他の生徒との関係を築くのがやはり難しいからだそうだ。ニュートン市のインクルージョンによる特別教育の成果としてはどの様なことがあるのかを質問したところ，次のようなことであった。

- 障害をもった子どもたちが，他の生徒と同じ教育が受けられる。
- 一般の生徒がモデルとなり，目標となる。
- 一般の生徒も障害をもった子を理解し，将来のためになっている。

③　学校視察より学んだ特別教育の現状から

学校視察においては，幼稚園から高等学校まで行かせていただいた。どこの校種，学校でも２０％近くの子どもが障害を抱えているそうで，担当するスタッフも一人の子どもに対して５人から６人ほどであった。この様な中で，特に印象に残っているのは，教育委員会と同一の建物で視察した幼稚園である。そこでは，半数の子どもたちが障害をもっていた。一クラス１５人で構成されており教員１人，アシスタント２人，職業訓練士，医学療養士が従事していた。普通の子どもたちは，８時３０分から１２時まで教育を受けるが，障害をもった子どもたちは，１３時までということであった。しかも重度の障害のある子に対しては，その後自宅へ赴くらしい。また，障害のある子どもが学校に登校する際の交通の手段が無料で提供されているということであった。このように人的，経済的に恵まれた環境のもとで，チームを組んで特別教育を実施していた。

これだけでも日本の現状と比べると随分と進んでいるわけだが，それ以上に保護者へのケアがすばらしかった。自分も２人の子どもをもつ親であるので，親の気持ちは十分にわかるけれども，もし自分の子どもに障害があると判明したときはどうしたらよいかわからなくなってしまうであろう。ここでは，そうしたときに医学的なことはしないけれども心理学的な手助けをするソーシャルワーカーとガイダンスをするためのエイドと呼ばれるスタッフがそろっているのである。

肢体不自由な子のための椅子

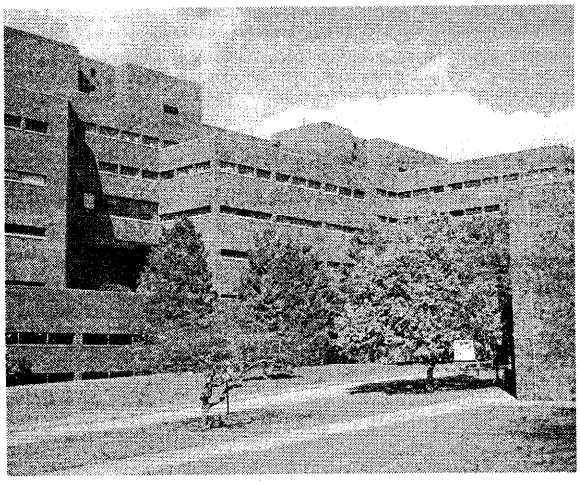
もう一つ校種間の連携も十分にとれているようだった。紙ベースの情報は，子どもの成長とともに動いていくが，その他にインターネット上にデータベースとして掲載され，誰もが見られる状態になっているということであった。

④　感想

本校では今，附属養護学校，幼稚園，小学校，大学と連携し，特別支援体制を構築し，教員一人一人が少しでも専門性を身に付けようとしている。そのようなときに，今回この様な視察の機会に恵まれ，先進的な特別支援教育の在り方を勉強することができた。

ニュートン市のように，しっかりとした特別教育を実施できる背景には，予算や人的な体制が十分にとれていることがある。予算も少なく，人的な余裕もない本校において，同じような特別支援教育ができるとは思わない。しかし，特別支援教育は，障害を持っている子だけではなく，周りの子どもたちへの教育になるという精神に基づき，現在の環境のもとでできる限りのことをやっていきたいと強く心に抱いた研修であった。

(2) 学校視察について



ボストン校教育大学院

今回の視察研修では，幼稚園から教育大学院に至るまでの８校を訪問した。

まず，最初に訪問したのは，マサチューセッツ大学ボストン校教育大学院である。聞くところによると，マサチューセッツ州では，学部レベルで教員課程を修了した場合に付与される教員免許は，５年間の期間限定の仮免許であり，終身免許を取得するためには修士課程レベルでの教員養成課程を修了する必要があるそうだ。副学部長との懇談会でわかったことは次の通りである。

・１０００人の大学院生が在学している。
・３５のライセンスを取得できる。
・３５０人がカウンセリングや心理学を学習しており，校長となるためのプログラムもある。
・特別教育に対する意識が高く，肢体不自由児や学習障害児に関するプログラムを１００人の職員によって実施されている。
・年に３０００億ドルの寄付金があり豊かである。日本では，教育系への寄付金は少ないがアメリカでは，マイクロソフトなどの企業から多大な寄付をもらっている。
・大学院を出てからの教員の評価はできないので，教育大学院としての成果はまだよくはわからない。

このように，先進的なアメリカにおいても教育大学院自体の評価はわからない状態であり，我が国において推進されつつある教員養成専門職大学院の在り方を考えていく上で貴重な体験であった。

次に，公立の小学校と中学校を視察した。特に印象に残っている２校を紹介したい。

一つは，パトリシア・ケリー校長のボーエン小学校である。ここでは，日本人の大神先生と日本からニュートンにやってきて，子どもをこの小学校に通わせているという３人の保護者が我々のためにやってきてくれて，日本語による施設案内と説明があったのでとてもよく状況がつかめた。わかったことは，次の通りである。

パトリシア・ケリー校長

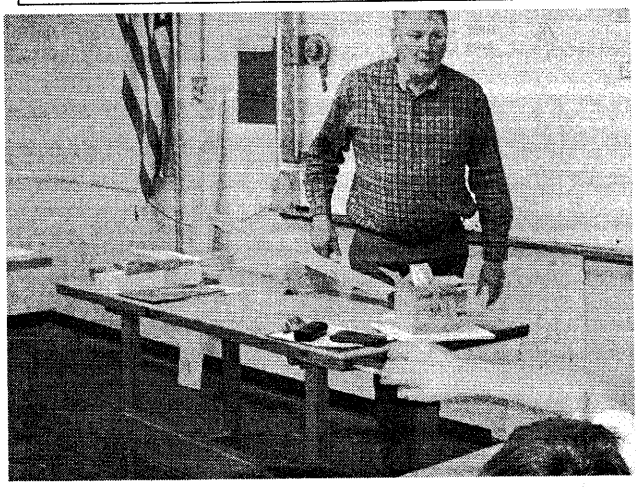
・３９０人の児童が在籍しており，２６の言語を話している。
・言語の授業はないけれども，英語を全く話せない児童のためのＥＬＬプログラムというものがある。
・どのクラスにも担任とアシスタントがいる。クラスによっては保護者のボランティアがいて，担任の手助けをしている。
・教科書というものがないので，教員がすべて教材を作成している。
・授業のやり方は，スキルを教えるというよりも論理を中心としたものである。
・学活や道徳，清掃などはなく，授業のみ
・ＰＴＡ活動は盛んである。しかし，委員会というものは存在せずに，すべて学校の要請に応じたボランティア活動が中心である。主な仕事内容は，寄付集め，アシスタント，図書の貸し出し，学校行事の手助けである。
・教員の勤務時間はフレックス制であり，授業が終われば帰宅してしまう。

ここで，特に感心させられたことは，ＰＴＡ活動である。委員会制をしいて活動している日本では，なかなか積極的なＰＴＡ活動は望めないところである。しかし，ボーエン小学校では，全くのボランティア活動だけといった，義務感にとらわれるのではなく子どもと一緒に楽しもうといった姿勢がみちあふれていることに感動した。

もう一つは，ウエンズリー中学校である。ボーエン小学校長パトリシア・ケリーさんの旦那さんが教頭先生を務めていた。訪問当日，学校長は１ヶ月に一度の父親の会を実施していたためこの教頭先生から学校の説明を受けた。校舎建て替え中であったが，過去の卒業作品が校舎の壁に飾られており，暖かみを感じた。ここで分かったことは次の通りである。

・１学年を５つに分割し，２２人の生徒を３人の先生でチームを組んで教えており，特に英語，数学，社会に力を入れている。この２２人のことを６年生ではハウス，７年生ではクラスターと呼んでいる。
・音楽，技術，美術が選択制となっており，体育は必修である。
・学業や心理面に関する相談を請け負うカウンセラー６人が常駐する。
・選択音楽授業では，６年生でキー　ボードを，７年生ではジャズを，８　年生では

コンピュータを利用して作　曲や理論を学習することになっている。
・通常中学校では　木工の学習はやらないことになっているのだが，木工と理科を組み合わせた合科的なテクノロジーの授業を学習している。



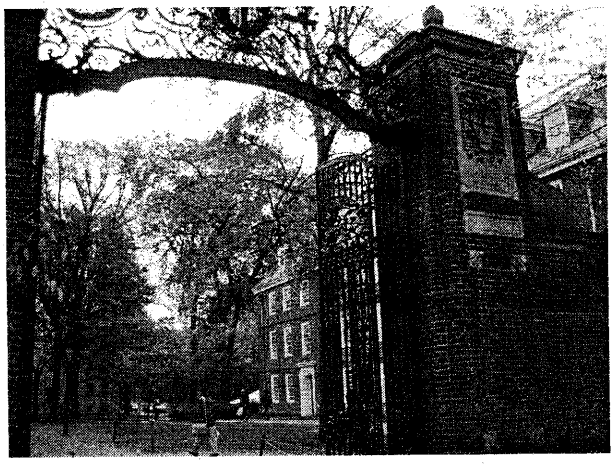
テクノロジーの授業

最後に４つのグループに分かれて，授業を参観した。８年生の英語の授業では，読書感想文をうまく書くための学習であった。教師が何かを教えるというのではなく，ポイントだけを与えて，友だちとの議論を進めていくことが中心であった。最終的には教師の評価が入るらしいが，それよりも教師に頼らない学習を目指す姿勢に，アメリカ教育の神髄を見た気がした。

(3) 教育的文化施設見学について

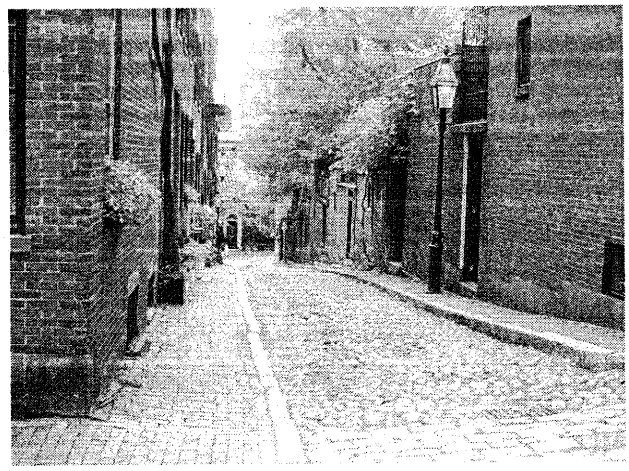
① ボストン編

研修２日目。ボストンにおける，教育的文化施設の見学をした。１６３０年に建設された歴史ある町である。伝統ある大学が多く，教育の様相を肌で感じた。多くの見学場所に行ったが特に印象に残っているのは，次の３カ所である。



ハーバード大学正門

まず一つ目は，チャールズ川を挟んで対岸に位置するハーバード大学である。。いわずと知れた世界有数の名門大学で，創立は１６３６年である。エマーソン，セオドア・ルーズベルト，フランクリン・ルーズベルト，ジョン・Ｆ・ケネディを輩出している。日本でも竹中大臣が卒業したという説明をしていた。皇太子妃雅子様が嫁いだとき鳴り響いたという鐘が特に印象的であった。



ガス灯と石畳のエーコン通り

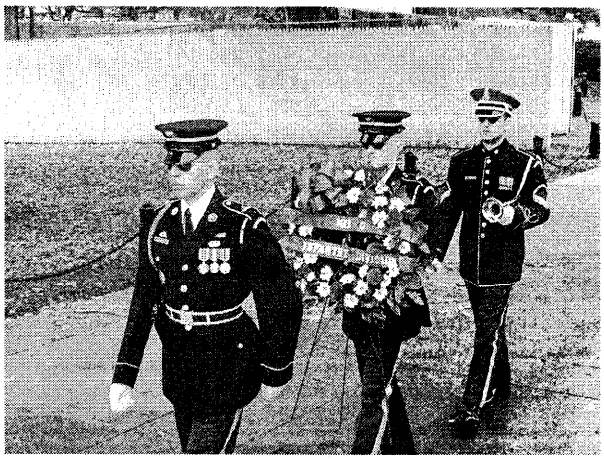
二つ目は，ビーコンヒルである。アメリカの歴史ランドマークに指定されている地域で，赤レンガの街並み，石畳の路，ガス灯のほのかな灯り等，今にも馬の蹄の音が聞こえてきそうな１８世紀の情緒あふれる風景に幻想の世界に入り込んだ気がした。

特に，絵はがきや写真集に登場するエーコン通りや目抜き通りマウント・バーノン通りには，アンティークショップやギャラリーが多く，１日かけてゆっくり歩きたいところであった。

三つ目は，ボストン美術館である。館内は，１日かけても廻りきれないほどの広さであった。アメリカ建国１００周年を記念して建てられたものだけあって，所蔵品の数の多さに驚いた。特に，ハーバード大学と共同で発掘・収集したとされる古代エジプト美術や体系的に収集された日本や東洋の美術に感動した。

② ワシントンＤＣ編

研修もいよいよ最終段階に入り，３つめの訪問地ワシントンＤＣを見学した。アメリカ合衆国の首都となるべく建設された都市であり，碁盤の目のような整然とした街並みであった。ここでは，ホワイトハウスや国会議事堂などの重要な政府機関とスミソニアン協会の博物館や美術館等を中心に見て回った。



無名戦士に敬意を表す儀式

市内観光で最初にいったのがアーリントン国立墓地である。ここには，歴代大統領や政府高官とともに２９万人もの戦士が眠る広大な墓地である。ケネディ大統領一家の墓もあり，霊を癒すために常にガス灯によって火がともされていた。また，見学に訪れた際，たまたま無名戦士の墓の儀式が執り行なわれており，アメリカ合衆国の軍人に対する敬意の強さを強く感じさせられた。

記念堂から見たワシントン記念塔

次に，リンカーン記念堂，ホワイトハウス，国会議事堂へ行った。この中でも特に興味があったのは，リンカーン記念堂である。もちろん第１６代大統領リンカーンの功績を称えるために建設されたものである。入口を入って左手の壁には，「人民の，人民による，人民のための政治」で有名なゲティスバーグの演説が彫り込まれていた。しかし，自分にとってはこのことよりも，映画フォレスト・ガンプで主人公がベトナム戦争について演説した後に，恋人と再会し抱き合うシーンで有名なリンカーン記念堂前の池に感動した。この池はワシントン記念塔を映すための池で、reflect pond(反射池)と呼ばれている。ここはマーティン・ルサー・キング牧師が 20 万人の聴衆を前に黒人開放を求める「I have a dream・・・」の演説をしたところでもある。

最後にスミソニアン博物館に行った。特に人気の高い，航空宇宙博物館と自然博物館だけを見学した。印象に残ったことは，すべて無料で見学できることとセキュリティが厳しく荷物検査をしなければ中に入れなかったことである。展示品としては，ライト兄弟の飛行機「フライヤー」とアポロ１１号の司令船，月の石，それに日本の零戦にとても興味が高まった。特に月の石は展示しているというよりは実際に手で触ることができ，そのなめらかな感触がずっと残っている。

3　おわりに

平成１７年８月に，つくばの教員研修センターで私を含め，１７人の附属教員が全国から集結した。始めは，全く知らない人たちとうまくやっていけるのかとても不安なスタートであった。しかし，一泊二日の研修が進むにつれて，それぞれの個性が生かされ，仕事もうまく分担されて何とかなりそうだという気持ちがもてるまでになった。そして，この１６日間という結構長期の研修を無事終え，心が一つになり充実感で一杯となった。

ところで，この１６日間で自分にどんなことがプラスになったのか，どんな点が成長したのかを振り返ってみると次のようなことであると思う。まずは，日頃学校という空間でしか生活をしていないため，広く社会の状況をつかめていなかったが，アメリカという世界一文化の進んだところで，先進的な教育状況を知ることができた。また，建国して日が浅いアメリカの歴史を垣間見ることで，人間の力のすばらしさを感じることができた。また，研修内容とは直接関係することではないのだが，１７人の仲間と１６日間寝食をともにすることで，他附属における学校経営や研究の様子を知ることができ大変参考になった。まだまだ，思い起こすと沢山の成果があろうが，これらのことを教師をはじめ，広く多くの方に研修報告をし，教育現場に何らかの形で取り入れていこうと意を決したところである。

学校視察で研修する附属学校Ａ団の仲間